

# 経帷子

浄土真宗ではみかけることはないのですが、他宗



の葬儀に参列した際に見かけることもありますのでご紹介させていただきます。

「経帷子」とは、葬儀の際に死者に着せる着用する白衣の事です。その衣に、仏の名前や、经文、陀羅尼(真言)、六字名号(南無阿弥陀仏)などが記されています。

イメージしやすいところであれば、四国の八十八か所巡礼の装束が経帷子です。背には南無大師遍照金剛と記され、周りに巡礼の際の御朱印を記していきます。

巡礼の姿は修行僧の姿そのものです。その姿と同じであるという事は、経帷子を用いる宗派は、死後、修行の旅に出るといった概念があります。この世は誘惑も多く、死後、浄土において修行をしようという思想です。

最初に浄土真宗ではみかけることではないといいたのが、ここが理由なのです。阿弥陀如来は、迷いの闇が晴れない私どもを深く見つめられ、そして思索し、ご修行を遊ばされました。今生きているときから、弥陀の



願いの船の上に乗船させていただいてるのです。

昔は、W杯に出ただけで喜んだ。今は一勝しても喜べない。人間を油断させる身は難しい。ガッ

# こんなところに 仏教用語

身近な仏教用語を紹介しています。

# 叫喚

寒くなりましたので温泉の話から。長崎県は雲仙にある温泉には、ゴーゴーと音を



立てる場所があります。地下のマグマ溜まりからの蒸気が地表に漏れている音です。この地域は叫喚地獄と呼ばれています。

日本では地獄の様相は平安時代中期の僧侶であり浄土真宗の七高僧の源信和尚が『往生要集』に記されています。地獄は八大地獄に分けられ、生前の罪の重さに応じて行き先が変わります。軽い方から四番目にある地獄を「叫喚地獄」といいます。

叫喚地獄は、むやみに生き物を殺したり、盗んだり、浮気をしたり、お酒で迷惑をかけたかたとしてきたものが生まれ変わる地獄です。この地獄に落ちると、油が煮えたぎる大釜に投げ込まれたり、火が燃え盛る部屋に閉じ込められたり、口の中から溶かした銅を流し込まれたり様々な責め苦にあいます。罪人は泣き叫びますが、業が尽きるまでは繰り返し繰り返し苦しみます。

ここで、酒の罪が出てきますが、ただ酒を飲んでいただけでは地獄行とはなりません。お酒を飲んだことにより気が大きくなり迷惑をかけすぎると落ちていくようです。

年末年始はお酒を飲む機会が増える方もおられるでしょう。くれぐれもご注意を。

